

「北上山地」の呼称に関するターミノロジー

— 地理教育における自然地理用語と自然地域名の問題(2) —

米 地 文 夫*

(1993年6月30日受理)

1 はじめに

地理教育のなかで、地名の教育の問題と自然地理教育の問題とは、ともに地理嫌いを生み出しやすい「躓きの石」であり、その両者の組み合わせである自然地域名の問題は特に教育の現場で種々の困難をもたらしている。

前報では、この問題の例として「北上盆地」と「北上平野」をとりあげ、多角的な検討を試みた。すなわち地名の教育の問題と自然地理教育の問題との重合した「地理教育用語としての自然地域名称」のもつ問題点を具体例を通じて考察しようとしたものであったが、今回は「北上山地」の呼称を例にとりあげ、この問題についての考察を深めたい。前報と併せて地理教育、自然地理、地名学の各分野の方々のご批判を仰ぎたいと考えている。

2 北上の山々は現在どう呼ばれているか

岩手大学教育学部の学生15人（うち13人が3年次、他に2年次と4年次の学生が混入）に、岩手県の略図を示し、その東半を占める自然地域、すなわち、北上山地、北上高地などの名で呼ばれる山々の名称を回答させた。対象学生のうち、地理研究室に所属するものは三分の一、また出身地は北海道（道南）1名、青森県（東部）2名、岩手県10名、宮城県2名で、1991年10月21日「自然地理学特講」の講義中にアンケートの形で他の問いとともに答えてもらった。結果は次の通りである。

北上山地	: 6名
北上山地（高地）	: 2名
北上高地	: 2名
北上高原	: 1名
無回答	: 4名
計	15名

この学生達のほとんどは、小学校中学年当時は北上山地として、また、少なくとも中学校進

* 岩手大学教育学部

学以降は北上高地として、学習したはずである。回答のバラツキと両方の併記とが、地理教育用語の改訂の与えた影響を示している。これに対して、西縁の山脈は（質問の意味を取り違えて個々の山名を答えた1名以外は）全員同じ奥羽山脈という答えであった。

同年10月31日他のクラス（「自然地理学」）の講義においても同様にアンケートの形で答えてもらった結果は次の通りである。このクラスは地理ないしは社会科専攻の学生の比率が上記のクラスに比し低く、そのためか無回答や誤答が多かったが、2年生が主であったため、高地と答えた学生がより多いようにも思われるが、速断はできない。（他の属性はほぼ前者と同じ）

北上山地	: 23名
北上山地（高地）	: 3名
北上高地	: 10名
北上山脈	: 2名
無回答ないし誤答	: 23名
計	61名

上の結果には「自然地理学特講」におけるアンケート回答者と重複する者は含まれていないので、両者を合計すると、

北上山地	: 29名
北上山地（高地）	: 5名
北上高地	: 12名
北上高原	: 1名
北上山脈	: 2名
無回答ないし誤答	: 27名
計	76名

上記調査から、一年半後の1993年5月13日に、「自然地理学」の受講者に、同様の問を試みた。この学生達は、前記二回のアンケート回答者のほぼ2年下の学年に当たる。今回は、北上山地と北上高地との二つのみに回答が分かれた。今回は、岩手県内出身か、県外出身かによって違いがあるかどうかもみた結果、その間に大きな差異があることが明らかになった。結果は下記の通りである。

	岩手県内出身者	県外出身者	計
北上山地	49名	3名	52名
北上高地	25名	11名	36名
計	74名	14名	88名

地図のみを示して地名を書かせた前回とは異なり、北上山脈、山地、山系、高地、高原の五つから選ばせたが、上記二者以外の回答はなかった。一年半前の回答者中、北上高地と答えた学生は、北上山地（高地）と答えたものを合わせても、全体の22.4%、無回答ないし誤答を除

いても34.7%であったが、今回は40.9%に達している。ほぼ二年上に当たる学生達と比較すると、「北上高地」がより定着しつつあることは確かである。しかし、岩手県内出身者に限ってみると、「北上高地」の回答率は33.8%に過ぎない。岩手県外の出身者の場合は、主として学校教育の場のみで、この地域の自然地域名称を学ぶため、教科書や地図帳どおりに、北上高地という名を答えた者が多かったとみられる。しかし、岩手県内出身者の多くは、日常的に「北上山地」と呼びならわす環境のなかで育ち、なかなか「北上高地」が定着していないといえるのである。

このことを検証するために、一般の出版物を点検した。岩手県庁内にある岩手県統計協会刊行の岩手県民手帳の資料編のなかにある「岩手県の概要」には「北上山地（北上高地ともいう）」と書かれており、岩手日報社の岩手年鑑平成5年版では「北上山地」が用いられている。また、盛岡市(1990)編の「もりおかの地名」でも「北上山地」と書かれている。すなわち、一般には依然として「北上山地」の語が多用されているのである。

3 現代の地理教育用語としての「山脈」、「山地」、「高地」

前節で述べたように、岩手県の主要な公的機関や地元のマスコミ、あるいは大学生達の間では、「北上山地」を使用しているものが多い。しかしながら、地理教育の場では「北上高地」が用いられている。この間の事情は、戦後の地理教育における自然地域名が、1960年代～70年代の「北上山地」から、1980年代以降は「北上高地」に変わったものの、依然として「北上山地」の方が一般には定着していることを示している。

では、このような一見、混乱ないしはズレがあるとみられる事態の起こった背景はどのようなものであったろうか。現在、地理教育用語として用いられている「山脈」、「山地」、「高地」の定義は、1982年から改定されたものであるが、さかのぼって、その前の段階をみてみよう。

1954年、建設省地理調査所（現国土地理院）が専門の研究者や関係官庁等の意見を徴して定めた「主要自然地域名称図」は、自然地域名称を統一しようという意図で作られたもので、1958年に文部省が発表し、翌年刊行（文部省1959）の「地名の呼び方と書き方<社会科手びき書>」もほぼ、これに従ったものであった。

しかし、文部省がこの「主要自然地域名称図」の内容には従わず、手直した部分があった。それが「山地」と「高地」の箇所である。

「主要自然地域名称図」と「地名の呼び方と書き方」との間の異同を対比させてみる。

	「主要自然地域名称図」 (地理調査所 1954)	「地名の呼び方と書き方」 (文部省 1958)
山地	地殻の突起部をいい、総括的な意味をもつものとする。	同左
山脈	とくに顕著な脈状をなす山地をいう。	同左
高地	起伏はさほど大きくないが、谷の発達が顕著であり、表面のおしなべて平坦な山地を、とくに高地の称でよぶ。地勢の上では山地と高原との中間的形態のものを	(この項はない)

いい、人文的には居住の中心が谷底にある地域をいう。

高原 平坦な表面をもち、比較的小起伏で、谷の発達あまり顕著でなく、表面にまで相当の居住が営まれている山地をいう。

平坦な表面をもち、比較的小起伏で、谷の発達あまり顕著でない山地をいう。

後者、すなわち「高地」の語は用いないとする文部省方式が、その後、解説書(松尾1959)や大蔵省印刷局刊行の「当用漢字・現代かなづかい・送りがなのつけ方」(白石1960)の中への転載などにより、定着していった。それが教科書や地図帳にとどまらず、現在では一般書に至るまで、この用語法による「北上山地」が普及し、文部省が「北上高地」に変更したのちも、依然として多用されているのである。

すなわち、公的には1960年代~70年代は「北上高地」(一般)と「北上山地」(地理教育)との併用期であったにも拘わらず、「北上山地」のみが普及し、1980年代以降の「北上高地」への統合期になっても、「北上山地」が一般化してしまっているのである。そのことの是非の問題はしばらく措いて、なぜ文部省が例外的に地理調査用語を用いなかったのかを調べてみよう。

その経緯については、山口(1984)はこう説明している。

「文部省では、なるべく語の数を少なくすること、『高原』の称と混同しやすいこと、などの便宜を考慮して、この概念を『山地』のなかに含め——というよりは『山地』は教育上包括的な意味のものであるから、とくに以上のような(米地注：表面のおしなべて平坦な、いわゆる準平原が比較的良好に谷に刻まれた山地など、のような)地形的特徴を抽出する要を認めない。したがってこの用語の必要がない、と考える方が適切であるかもしれぬが——『高地』の称をとくに採用していなかった。」

この「地名の呼び方と書き方<社会科手びき書>」における文部省用語「山地」の例示¹⁾としては、紀伊山地、筑紫山地とともに北上山地があげられており、山地とすべきものの代表的なものを見なされていたことがわかる。

けれども、敢えて地理調査所(のち国土地理院)の定めた「北上高地」という名称に代えて、「北上山地」としたものを、のちに「北上高地」に変更して地理調査所の定めた名称に合わせた意図や根拠については、必ずしも明確にはされていない。もちろん山地は包括的な名称であるから、それを山地の中の、より限定された意味の高地を使うほうが、より適切であると考えたのであるかも知れない。

しかし、「高地」という名称には、次節で述べるように多くの問題点があるのである。

4 地理教育の場における「山脈」、「山地」、「高地」の用い方の世界と日本との比較

この章では、現在の日本の地理教育における自然地域名称の扱いに、大きな不備があることを、「山脈」「山地」等の例をとりあげて指摘したい。その不備とは、世界地理学習と日本地理学習とでは、異なった定義や基準で自然地域名称が扱われていることである。

例えば、前項で述べた「地名の呼び方と書き方<<社会科手びき書>>」には、日本の自然地域名称については、詳細に記載され、それまでの用語とは大きな変更を行っているが、世界については全く触れられていない。したがって、世界地理では、それまでの用語とほとんど同じままである。このため、原語の表現の如何に関わらず、世界の山々の集合は、ほとんど「山脈」と呼ばれている。それに対して日本の山々の集合は「山脈」、「山地」、「高地」に分けられているのである。

具体的に、そのことを、日本については地理調査所の主要自然地域名称図と現在高校で使用されている地図帳の一つである「高等地図帳」(1993, 二宮書店)の中の「日本の地形区分」図, 同じく世界については同地図帳の「世界の地形」図を用いて調べ、第1～3表を作成した。これらの表から、「山地」と「山脈」については、世界の地形の場合、「山脈」のみが名称を付して図示されており、日本の地形については、「山地」の数が「山脈」のそれを大きく上回っているという、対照的な取り扱いが読み取れる。

表1 「主要自然地域名称図」(地理調査所1954)に示された山地関係自然地域数

地域 \ 地形	山 脈	山 地	高 地	高 原
北 海 道	1	6	0	0
本州東～中部 *	5	22	3	0
本州西部	2	10	1	2
四 国	1	2	0	0
九 州	0	9	0	0
計	9	49 **	4	2

* 若狭湾—伊勢湾を結ぶ線以東の地域。
** このほかに、淡路島に山地1がある。

表2 一高校用社会科地図帳(高等地図帳, 二宮書店1993)の「日本の地形区分」図に示された山地関係自然地域数

地域 \ 地形	山 脈	山 地	高 地	高 原
北 海 道	1	4	0	0
本州東～中部 *	5	8	3	0
本州西部	0	2	1	2
四 国	0	1	0	0
九 州	0	2	0	0
計	6	17	4	2

* 若狭湾—伊勢湾を結ぶ線以東の地域。

表3 一高校用社会科地図帳(高等地図帳, 二宮書店1993)の「世界の地形」図に示された山地関係自然地域数

地 域	地 形*	山 脈	高 地
ユ ー ラ シ ア		9	5
ア フ リ カ		2	2
オ ー ス ト ラ リ ア		1	0
北 ア メ リ カ		4	0
南 ア メ リ カ		1	1
計		17	8

* 山地・高地は、この図においては、名称を付して図示されたものはない。

この問題は地形のスケールにも関連する可能性があるもので、高校用の地図帳で用いられている海外の自然地域名称のうち、日本の地形地域の単位に近い、より細かなものについて、子細に点検してみたが、上記の地図帳の世界の部分図には「山地」は、一か所のみであった。その山地は北米西岸のカナダ沿岸にある海岸山地 Coast Mountains であるが、これは同じく北米西岸の合衆国沿岸にある海岸山脈 Coast Range と区別するために、例外的に「山地」の語を用いたのである。その他の所では、Mountains も Range も、全て「山脈」と訳している。これは、戦前以来の地形観であり(その当否は、ここでは論じない)、日本について適用された地形観とは異なる。すなわち、世界と日本の差は、スケールの違いから生じたというよりも、定義のしかたの違いにより生じたものと考えられる。

相村(1979)は、国土地理院・文部省の「日本の自然地域名称」の山脈と山地の区別について、次のような例示と解説をしている。「従来の紀伊山脈はその山地の走向が東西でなく数条になって南北の方向をとっていることから、これを紀伊山地と改称したことについては、山脈の定義を地形学的な形態の立場に立って」行ったからであると述べ、「従来のような地質学的な地体構造的立場に立って脈絡のある一列の」ものとしてはみない、というのである。しかし、この論法でいえば、世界最高の山脈であるヒマラヤ山脈も、ガンジス川とその多くの支流の谷によって各所で分断され、幾つもの南北方向の連山に分けられてしまい、ヒマラヤ山地と呼ぶべきであるということになる。世界と日本とで、同じような地形に、異なった定義を当てはめ、違う名称で呼ぶような不統一な決め方には、筆者は疑問を抱かざるを得ない。

「高地」については、「高等地図帳」(1993, 二宮書店)の中の「世界の地形」図には記入はないが、部分図には数例見いだせる。同地図帳や「標準高等地図」(1977, 帝国書院)、「社会科 新高等地図」(1992, 東京図書)などをみると、ギアナ高地 Guiana Highland, 中央ロシア高地 Central Russia Upland, スコットランドのノースウェスト高地 North West Highlands, 同じくサザン高地 Southern Uplands²⁾, フランスの中央高地(マシフ・サントラル) Massif Central, 同じくラングル高地 Langres Plateau などであり、互いにかなり性格の異なるものが「高地」として包括されている。Massif Central は、むしろ直訳して中央山塊とすべき性格の

地域であり、日本で「高地」とよんでいるものにも、この「山塊」を用いるべきかも知れない。

5 「高地」という用語の問題点

「高地」という用語を用いることには、筆者はいくつかの点で疑問や批判的な見解を持っている。それらを列挙してみよう。

① 高低を基準にした「高地」は、自然地域名称と言えるか？

高地 highlands は、低地 lowlands と対になる用語であり、形態的な意味を伴っていないので、本来は高度の高低のみを基準にした呼称である。したがって、

a) 各種の地形地域を含むような広い範囲をカバーする用例か、逆に b) 狭い範囲の特定の地形を指す用例か、のいずれかになるが、後者の意味での「高地」は、自然地理的には特定しにくい。それぞれの用例をあげると次のようになる。

a) の高地の用例……中央高地：日本の中部地方の内陸部に広がる多くの山脈、高原、盆地を包括する用例

その他、ニューギニア高地人とか熱帯高地都市（バンドゥンなど）などと書く場合の高地もこれに類する。

a) の低地の用例……カスピ海沿岸低地：ボルガ川三角州をはじめ広大な低地を指す。

その他、アラル海東南一帯のツラン低地など、例が多い。

b) の高地の用例……ほとんど存在しない。

強いて挙げればギアナ高地があるが、これもむしろ a) のタイプであろう。

b) の低地の用例……東京の下町低地など

このようにみても、「低地」は自然地域名称として用いられているが、「高地」の場合には自然地域名称としては、漠然としており、用いにくい。日本で定めた「高地」も、厳密には自然地域名称とは言いがたく、論理的な定義を与えにくい用語である。有井(1985)が、これらの「高地」がわが国の最高標高地帯を占めていない点で、その名が相応しくないという意見を述べているのも、上記のこととほぼ似た議論である。

② 日本で定めた「高地」に類したものを、海外においても探し得るか？

しかし、北上高地、阿武隈高地、飛騨高地、丹波高地の四つを「高地」とし、highland の英語訳を添えて定めた時、海外に同じような用例を想定しなかったのであろうか。筆者はおそらく、スコットランドの North West Highlands と Southern Uplands がそれであったと推定している。スケールのにも、200km×60km 程度で、北上「高地」とほぼ同じであり、地形的にも、人文景観も似ているといえなくもない。事実として当時このスコットランドの二例をモデルとしなかったとしても、現在、我が国の高等学校で地理の授業に使用されている地図帳に「高地」として示されている同スケールの「高地」は、これらなど、ごく少数例のみである。

しかしながら、スコットランドの「高地」と、日本の前記の「高地」とは、それぞれの国土内での位置付けに大きな相違がある。スコットランドでは、highlands と聞いたときに前述の二つの「高地」を思い浮かべる人はほとんどいない。スコットランドの人々にとっては、同国

は大きく the Highlands (高地地方) と the Lowlands (低地地方) とに二分されていることが、前提になっており、Dumbarton と Stonehaven を結んだ線の北西は前者で、ケルトの言語や文化があり、住民は Highlander と呼ばれる。一方、南東側は後者で、住民は Lowlander と呼ばれるのである。このような、地形と文化との重なり合った「高地」と「低地」との関係は、ドイツにおける hochdeutsch 語と niederdeutsch 語との関係などと似ている。North West Highland は、the Highlands の北西半部を占め、南西半部は Grampian Mountains になる。一方、the Lowlands の主要部分はいわゆるスコットランド地溝帯であるが、その南方が Southern Uplands になる。二つの「高地」が、北西と南という位置を示す名がついていることは、このようなスコットランド独特の地域認識と無縁ではない。

これに反して、日本の「高地」という用語は、伝統にも文化にも全く関わりがなく、住民にもなじみが無い。さらに日本全国のうち、(数十にのぼる山地・山脈に対し) わずか4箇所、国土の約6%にすぎない。これに対し、スコットランドでは「高地」は全土のほぼ半分を占めているのである。このような違いをみると、《スコットランドにおける「高地」と同じように、日本においても「高地」を認識できる》ということにはならない。

① 山地と高原との中間的形態が「高地」といえるか？

地理調査所の定義では、「高地は山地と高原との中間的形態である」としているが、そもそも山地を「総括的な意味をもつ」としていることと矛盾している。しかし、仮に高原・高地を除いた狭義の山地を考え、これと高原との中間のものを高地とするというのならば、むしろ高原性山地などという名称にすべきであろう。なぜなら、平坦な表面を持つという点で「高地」は高原と共通しており、谷が発達しているという点で「高地」と山地とは共通している、ということらしいからである。それならば中間的性格であることが分かるような名称にすべきであろう。

② 人文的要素を加味した「高地」は自然地域名称といえるか？

地理調査所の定義には「高地は、人文的には居住の中心が谷底にある地域をいう」とあり、「高原は、表面にまで相当の居住が営まれている山地をいう」とある。しかし、もし「高原」の表面の集落が過疎などで消失していったならば「高地」に変わるのであるだろうか。居住の中心が「高地」の表面にリゾート開発などによって移ったならば「高原」に変わるというのであろうか。そのような奇妙な名称変更を避けるためにも、定義は自然地理的論理のみで行い、これにその時の人文的現象がどのように対応しているかは、補足的説明に留めるべきであろう。

③ 地理教育の上で用語が多くなることが、マイナスをもたらさないか？

このことへの配慮もあって、当初文部省は「高地」を採らず、山地の中を含めたのであった。そのような懸念が無くなったとは思えない。まして、最近の傾向として、教科書どおり、地図帳どおりでなければ正解でない、と断ずることが多くなったことを思えば、教師が北上「山地」は間違いというような狭量な判断をしかねないので、このような複雑化は好ましいことではない。

④ 「高地」と同様のものが山地や山脈になっていないか？

有井(1985)は、「高地」と同様の特色をあらわす中山性山地 Mittelgebirge が日本各地にある(具体的な山地名は挙げられていない)ので、これら4つの「高地」は山地とする方が無難であろうと述べている。筆者も同感である。

以上に挙げたような諸点からみて、現在、地理教育の現場で用いられている「高地」の用法

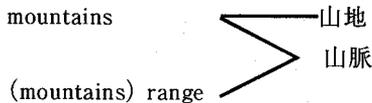
は、極めて不自然、不合理なものと断ぜざるを得ない。可及的速やかに、すくなくともせめて「山地」に戻すべきであろう、と考える。

6 「山脈」「山地」「山系」「山塊」などの用語の背景

北上「山脈」という呼び名は、長く地理教育のみならず、近代の日本社会において広く用いられて来た用語であった。現在「山脈」は、「とくに顕著な脈状をなす山地」という限定された意味で用いられることになっているが、かつては、より広く用いられ、「山地」や「高地」と今日よばれているものも、ほとんどが「山脈」であった。

梶村(1986)は、「日本語の『山地』『山脈』という語は、それぞれ英語の<mountains><(mountain) range>から借用して地理用語となったものである。」と述べている。この説明は一見妥当のようにみえるが、筆者は、賛同できない。

英語との対応関係でいえば、次の様になるはずである。



もちろん梶村(1986)も、このようなズレには気づき、それを次のように書いている。

「外国でも 'mountains' と 'range' という語を、必ずしも正しく使いわけて地名に用いているとは限らない。合衆国の Coast Ranges (海岸山脈) に対する Rocky Mountains (ロッキー山脈), Appalachian Mts. (アパラチア山脈) などが、その例である。また日本では、アパラチア山脈・ロッキー山脈などという表現に見られるように、range の総称詞のある地名は『山脈』, mountains の総称詞のある地名は『山地』と、必ずしも慣用化して意識しているわけでもない。」

梶村(1986)は、'mountains' と 'range' との間のズレに気づきながらも、両者を同レベルの用語と考え、後者は脈状のもの、後者をそれ以外のものとするのが「正しい」という単純に過ぎると思われる解釈を前提に論じているのである。

日本では、「山脈」という用語が江戸時代後期以降、一部に用いられてきた。この「山脈」という用語の推移の問題については、米地1993で詳説した。おそらく東洋独特の山の連なりを竜脈とみる思想を背景に、少なくとも箕作省吾以降、日本人によって訳語として多用されてきたものであるらしい。「山脈」という語は、中国にも古くからあったが、普通にはほとんど使われていなかった。その中国の「山脈」とは直接的には関係なく、日本で独立的に訳語として使われ始めたものと考えられる。

明治に入ってからも、ただ「山」とのみ記す例などもあって混乱していたが、やがて「山脈」に統一されて、戦前から戦後の1950年代まで、長く用いられたのである。その基準となったのは、荒井郁之助編(明治10年, 1877)の「地理論畧」や若林虎三郎編「地理小学」(明治16年, 1883)であろう。「地理小学」の巻1には「用語定義」という欄があり、山嶽の項に「周囲ノ

地ヨリ非常ニ高キ陸ヲ山嶽ト云フ 甚タ高キ陸ノ長ク連リタルヲ山脈ト云ヒ又一山脈ヨリ分支セル小山脈ヲ支脈或ハ横嶺ト稱ス 數多ノ大山脈一處ニ集合スルトキハ之ヲ總稱シテ山系ト名ク」とある。また「丘陵，山岳，高原ヲ高地ト稱ス」とあるのは現在の「高地」の用例よりも、むしろ、より妥当なものとして興味深い。

「山脈」という用語が、日本で広く普及したのには、日本人の山に抱く伝統的な親近感や、前述の竜脈からの連想などがあったためであり、現代の日本人にも、平野から望む景観として理解しやすいものであった³⁾。これに対して、「山地」は、包括的で、地図からみる、あるいは空中写真・衛星写真にみる形態の多様性と適合しており、地形地質など自然科学の分野では、戦前から広く用いられており、たとえば北上「山地」という用例も、田山(1935)の研究をはじめとして多数にのぼり、科学的用語を好んで使用した宮澤賢治⁴⁾の作品にもみられる。このように、地理教育の場では「山脈」が定着し、一般にも普及していたにもかかわらず、科学的な記載では「山地」が用いられることが多かった⁵⁾ことが、第二次大戦後の「自然地域名称」の定義に影響を与えたと思われる。

そのほかには北上「山塊」や北上「山系」も用いられていた。

「山系」はコルディエラ山系など、幾つかの並走する山脈の集合として用いられることが多いが、日本国内の例では、地質学的な「まとまり」ないしは「つながり」を意識して使われることが多いようである。もっとも、岩手県では、戦後、これまでの間に、「北上山系開発」事業などの例のように、官庁用語として用いたり、地元の新聞社が「北上山系」という大部の本を出したりして、「山地」とほぼ同義に用いられてきているが、しばしば、北上山地と呼ばれる地域よりも、やや広域を扱うというニュアンスで使われている。

「山塊」は、地形地質的に「地塊山地」と呼ばれているものを意識して用いられているらしい。東北地方でも、朝日山地、飯豊山地などは典型的な地塊山地であり、山脈が線状ないし帯状の平面形であるのに対し、面状であり、構造的な線で周囲を画され、方形ないし多角形に近い平面形になる。北上や阿武隈の場合も、これに類する。その点では、北上は「山塊」と呼んで「山脈」と区別する方が妥当であったとも考えられる。

北上や阿武隈の「山地」の場合、一般には「高原」とよばれることもあり、学生に、この論文の巻頭に挙げたアンケートの際に、「学問的なことは顧慮しないで、自分の好みで好きな呼び方を選ぶとしたら、どれがいいか」という問も試みたが、その答えには、圧倒的に「北上高原」が多く、「北上山地」や「北上高地」に大差をつけた。若い人達の感性に合うものとして、観光などに高原の名が用いられることが多いのも、このためである。しかし、高原的な部分のごく一部で、実体には合わない名称である。地学的には北上「準平原」ないしは北上「隆起準平原」などとよばれることも多い。これらについては別個の問題があるので、他の機会に論ずることとし、本稿では触れない。

7 「北上」という固有名詞部分の意味

ここまでは、山脈・山地・高地といった自然地理名称部分について論じてきた。その自然地理名称の前に、「阿武隈」とか「飛驒」とかの固有名詞部分がつく。これらの自然地域を示す固有名詞部分の呼び方の基準についても、文部省は1959年の「地名の呼び方と書き方」(社会科手引き書)の中で、次のように示した。

(1)長年にわたり、全国的な規模において習慣的に使用され、それが通念となっているものについては、その名称に従う。

〔例〕 関東平野

(2)山地にあつては、その主峰の名をとる。

〔例〕 八溝山地、金剛山地

(3)平地にあつては、その中心都市の名をとる。

〔例〕 大阪平野、山形盆地

(4)以上の基準による名称が適切であると認めがたい場合にかぎり、国名・郡名、またはそれらの複合名、その他の地域名をもって示すものとする。

〔例〕 吉備高原、津軽平野、美濃三河高原、九十九里浜平野

この(2)の山地は、山地、山脈、高地、高原の総称であるらしいが、高地や高原では主峰が明確でないため、いずれも(1)または(4)が適用されている。4つの高地は、飛騨と丹波は国名であるが、北上と阿武隈は河川名であり、山地の類いの固有名詞部分としては、極めて珍しい。もちろん十勝平野とか木曾山脈などのように同名の川がある例はあるが、いずれも国ないし地方名が先に命名されており、前二者とは異なっている。

現在では北上山地（あるいは山脈、高地）という地名が昔からあったように思われがちであるが、もちろんこれは明治以降の地理教育において命名されたものである。

筆者は1940～50年代にかけて、一関で過ごしたが、当時でも、東方に見える北上「山地」南部の山々は普通「東山」と呼ばれていた。東山煙草などの産物名にもみられ、今は長坂、松川、田河津などを合わせた町が東山町を名乗っている。

では地理教育においては、現在「北上山地」あるいは「北上高地」と呼ばれる地域については、どのように呼称が推移したであろうか。

地理教科書を見る前に、明治政府が日本の地理を明らかにするために、内務省地理局に編纂させた地誌である「日本地誌提要」（明治17年頃）をみてみよう。その巻之三十、陸中の「形勢」の項にはこうある。「陸奥ノ大山脈、二岐二分レテ南走ス。其西スル者ハ羽後ヲ劃界シ、其東スル者ハ中央ニ連結シ北上川其中ニ南流ス」とある。つまり固有名詞は無かったのである。

もともと、この山地には固有名詞が無かったため、初期の教科書には、山脈といいながらも、山脈名はなく、要所に具体的な山名が挙げられているのみであった。例えば大槻修二編「日本地誌要略」（明治10年、青山紅樹書樓）には、陸中について「東西・両山脈」として、その東の山脈の南方の部分について「東山ハ、即・其河東ノ地ヲ、總稱セル者ニシテ、室根山ノ脈、其東境ヲ圍ミ」とある。河東とは北上川の東の意味である⁶⁾。同様に、南摩綱紀編「小学地誌」（明治12年、文部省）には、陸中国の項に「二条ノ大山脈國中ニ互リ。西ニ御駒カ岳アリ。南ニ室根山アリ」とある。

地理学教科書における「北上山脈」という用語の最も早い用例については、筆者はまだ特定していないが、矢津(1889)の「日本地文学」には、「此ノ山脈ハ北上川ト並行スルヲ以テ之ヲ北上山脈ト称ス」と明記してある。すなわち、北上川に平行して長く伸びる山脈というイメージから名づけられたことが窺えるのである。地質学関係においても、ほぼ同時期に、この「北上山脈」が使われはじめており、例えば、Harada (1890)は独文の著書のなかで、Kitakami-gebirge と記している。

明治26年(1893)の學海指針社編「日本地理初歩」卷之上には、「…奥羽山脈中央ニ互リ、羽越山脈陸奥ノ西方ヨリ兩羽ノ國中ニ互リテ越後ニ至ル、阿武隈山脈ハ磐城ニ、北上山脈ハ陸中ニアリ…」とあり、同年発行の金港堂編の「小学校用日本地理」にも阿武隈山脈と北上山脈の名が採用されている。

前報(米地1991a)において筆者は、「奥ノ平野」という呼称が、岩手県内陸部の低地に対する自然地域名として、より広い地域を含んで用いられたことを指摘した。その際は金港堂が明治27年(1894)に発行した「小学校用日本地理」および「小学校用日本地理補習」の例を挙げたが、その後、明治34年(1901)に刊行された「小学地理書 卷一」(育英舎編輯所)にも、岩手県の項に「本県は東方に北上山脈あり、西方に奥羽山脈つらなり…(中略)…北上川、阿武隈川のほとりは、いはゆる奥の平原にして、ひろき平野をなし…」とある。このことは「奥ノ平野」ないしは「奥の平原」がある程度の期間、用いられていたことを示すとともに、「北上山脈」という用語は「北上平野」ないし「北上盆地」よりも古くから用いられていたことを示している。

第二期国定教科書「尋常小学地理」(明治43年)では、(奥羽山脈の)「東方に並びて南に阿武隈山脈、北に北上山脈の互れるあり。奥羽山脈との間に細長き平野を挟み、阿武隈・北上の二川其の中を流る。」とある。

第三期国定教科書「尋常小学地理書」(大正7年)でも、奥羽地方の地勢の項で、「東部にある山脈は仙臺平野によりて南・北に分たれ、北にあるを北上山脈、南にあるを阿武隈山脈といふ」とある。第四期国定教科書「尋常小学地理書」(昭和10年)や第五期国定教科書「尋常小学地理書」(昭和13年)でも、これとほぼ同じであるが、ともに「東にある山脈は仙臺灣のために南北の二つに分れ」となっている。これらでは「奥羽地方には南北に長い山脈が三列に並んでゐる。」などとあり、南北に伸びる線状の形態が強調されている。

8 地理教育における自然地域名称の統一・変更の問題点

上記の事実からみても、北上「山地」を北上「高地」と変えたことには疑問があり、その際、地元の人々や、地形や地名など地理の研究者の意見を、十分に聞き、討議する手続きをとったとは、必ずしもいえないようである。

北上の山々が、北上「山脈」と呼ばれたのは1893年にさかのぼるから、およそ百年前である。以後、第二次大戦後の、文部省による自然地域名称の設定に至るまで、ほぼ65年の間、「北上山脈」が地理教育の場で用いられ、一般にも親しまれていた。

1954年の地理調査所、1958年の文部省による自然地域名称が、戦前の地理学や地理教育の場で長年用いられた区分や名称を変えるほどの、新しい学術的知見や、より学術的に評価できる論理によって定められた、とは言い難い。従来の慣用の程度をどう評価するか、それぞれの自然地域をどう定義するか、などの検討が不十分なまま作成された「差し当たりの一応の目安というべきもの」が、教育の現場では、唯一正しい定義・正しい名称として地理教育の中に取り込まれ、現場の教師がこれに固執するという事態を生んだことは、多くの矛盾や誤解を生ぜしめる結果を招いた。

地理調査所は北上「高地」とし、これが官公庁をはじめ社会一般に用いられることを期したはずであった。その趣旨(山口1955)は、そののちも一貫して変わらず、例えば国土地理院と

なってからも同様の指針（同院1891）を出している。一方、文部省が北上「山地」としたため、教育現場への徹底が図られ（例えば松尾1959など）学校のみならず、社会一般にも広く北上「山地」が広まっていった。この方針は1978年の「地名表記の手引」（教科書研究センター1978）までは引き継がれていた。

ところが文部省による自然地域名称の一部の手直しが1880～1882年に行われ、北上「山地」は北上「高地」と呼ぶことに、再度変更を行なった。現場教師の間に当惑と混乱が生じたことは勿論であるが、このような指示に忠実な教育界のこととして、教育の場では北上「高地」を用いることになったが、四半世紀の間、北上「山地」を用いていた社会一般では、その後10年を経過して、今なお、その呼称が使われ続けており、NHKなど、ごく一部で「北上高地」が使われ始めた程度である。

1982年度から教科書や学校用の地図帳に「高地」と表記されたにもかかわらず、地理教育関係の副読本や地名事典などですら、依然として「山地」が用いられていた。例えば、岩手県地理学会編（1983）：『わたしたちの郷土 岩手県』、竹内理三ほか編（1985）の『角川日本地名大辞典 第3巻 岩手県』、1988年刊行の『新版岩手百科事典』などがその例である。平凡社地方資料センター編（1990）：『岩手県の地名（日本歴史地名体系3）』に至って、ようやく「高地」と表記しているという状態である。筆者は「山地」を用いている書が多いことを批判するつもりはない。むしろ、北上山地の名になじんだ人々のためには、むしろ適切であり、筆者自身は前述したように理論的には「高地」よりも「山地」のほうが、より妥当であると考えている。

前報（米地1991a）で、＜「北上盆地」か「北上平野」かという問いは、一自然地域の名称の問題に関する小さな問いかけのようにみえる。しかし、この一見些細な自然地域名称の問題は地理教育における多くの大きな問題と関わっている。＞と述べた。それは、この「北上山脈」か「北上山地」か「北上高地」かという問題についても同様にいえる。

その問題点の二三について述べてみよう。

まず、慣用ということの評価が欠けていることである。長い間、用いられていたものを変更することには、慎重な検討と配慮が必要である。そして変更の事由が、科学的にも、教育的立場からも、さらには社会一般の情勢からみても、変更が不可避、不可欠であると認められた場合に限るべきであろう。（もしも後述するような唯一「正しい地名」といった硬直した考えを捨て、種々の呼称の共存を認めるということならば、話は別である。）

次に、世界地理の教育と日本地理の教育とでは、異なった基準で用語が用いられていることの問題である。例えば、日本的な感覚で用いられている用語「高地」が日本地理について用いられ、それよりも広い範囲のもの（高原、山塊など）を含めた用語「高地」が、世界地理に用いられている。逆に日本的感覚の用語「山脈」は世界地理においては多用され、日本地理については、その「山脈」を「山脈」、「山地」、「高地」などに解体したのである。

スケールの相違の問題にも配慮すべきで、日本と他の造山帯の地域との共通性を見失わせ、日本を「例外」として誤認させないためには、日本列島自体が、ヒマラヤなどと匹敵する一大山脈であることを正しく理解させるべきであろう。

日本の地形を海外に紹介する場合にも配慮した自然地域名称であるべきであり、例えば今用いている北上「高地」を、そのまま Kitakami Highland と訳したのでは実際の形態は伝わらない。むしろ Kitakami Mountains の方が適切であろう。

前報（米地1991a）でも論じた、地理教育における画一性、唯一の正解を求めようとする傾

向については、再度指摘したい。しばしば「児童生徒に無用な混乱を与えないように…どれが本当は正しいのかを明示して欲しい」という現場の教師からの声がある。だがこのような要求は、むしろ教師自身が安易な「唯一の正解」という投げどころが欲しいと願っていることにはかならない。むしろ多様性や多義性をもつ地表の諸事象こそが現実の地理学の対象であり、安易に○と×との二つに分けるような安直な類別を、地理教育に持ち込むことは誤りである。

これまではあまりに性急に「正しい、唯一の地名」を教えようとしすぎたのであり、ある年までは「北上山脈」が正解、ある年からは「北上山脈」は間違いで「北上山地」が正解、またある年から「北上山脈も北上山地も間違いで、北上高地が正解」などと変わるなどということは、極言すれば、ナンセンスなのである。こどもが混乱するという理由で、権威のある？機関などの審議結果に安易に頼るのは問題が多い⁷⁾。複数の正解、多様な解釈のあることを、もっと積極的に地理教育に取り入れてゆくべきである。

9 おわりに

北上の山々に付する自然地域名称については、次のようにまとめられる。

○「北上山脈」という呼び名は、東洋的ないし日本的な思想や感性になじむが、すでに使用頻度が低くなり、平面的広がりを持つ形態に合わないことからみても、今後も復活はしないであろう。

○「北上山地」は、総括的ではあるが、自然地理学的には問題の少ない呼称である。

しかし、他の山地に、山脈とよばれるものを多く残したまま、特定のものを（いわば少数派として）山地とよぶことには問題がある。

○「北上高地」は、自然地理学的には問題が多く、形態、高度のいずれの面からみても、問題が多い。これに人文的な意味をも持たせることは不適當である。

○「北上高原」は、自然地理学的には全く不適當である。（そのごく一部を高原と呼ぶことには、あえて異論はとなえないが…）

○「北上山塊」は、自然地理学的には妥當であるが、一般になじみが薄く、使いにくい。

○「北上山系」は、スケール、語義などからみて、不適當である。

自然地域名称一般について敷衍していえば、次の点が挙げられよう。

●自然地域名に基準を設ける場合は、自然地理学的論理によって定められるべきである。

●しかし、単一の呼称を、唯一正しいものとするのは誤りである。

●教育現場の側のそのような発想は、かえって自然地域の正しい理解を妨げている。

●特に文部省が、安易にこれを定めたり、変更したりするのは妥當でない。

●このような問題を的確に扱い得るようになるためには、地理学、わけても自然地理学とその論理が重視されなければならない。

すなわち、この拙論の副題に、地理教育云々と書いておいたが、自然地域名称に関する問題はむしろ地理教育以前の問題でもあるといえよう。この問題にみられるような、自然地理学的な論理を欠きがちな現状を改善するためには、大学における自然地理学（の研究と教育）の充実をはじめ、自然地理学の発展が、不可欠であろう。

以上のような「まとめ」を行っても、なお、残された問題がある。それは、日本地理の学習と世界地理の学習との間にある、自然地域名称の定義の違いである。日本のそれを、あまりに

明確に（明確とは、必ずしも正しいことを意味していない）定義してしまっているため、世界の自然地域名称との間に、差異が生じてしまっているのである。前報でとりあげた「盆地」、この報文でとりあげた「山脈」などが、その例である。この問題の検討は、今後の重要な課題であると筆者は考えている。

（本稿は、1992年6月、岩手大学教育学部学会37回研究発表会において報告した内容を基にし、その後得られたデータ等により加筆・訂正したものである。ご意見、ご助言をいただいた今井功氏はじめ多くの方々に謝意を表す。）

注

- 1) 相村(1986)が指摘している三国山脈の例は興味深い。すなわち、以前から使われていた三国山脈の名は、地理調査所の「主要自然地域名称図」では越後山脈に包括されて消えたが、文部省はこれを残した。これは三国から見通せるという景観的な意義が認められたものらしい。
- 2) 日本の高等学校用地図帳の、この「高地」に付されている英語表記には、Southern Highlands とあるものもあるが、Bartholomew Gazetteer of Britain (1977)などに従い、Southern Uplands と呼ぶ。なおギアナ「高地」も Guiana Uplands と呼ばれることが多い。
- 3) この問題については、別報（米地1993）で論ずる。
- 4) 宮澤賢治も科学的語彙を好んで使ったので、「種山ヶ原」「イギリス海岸」などの作品中に「北上山地」の語がみられる。これらは1920年代に執筆された。
- 5) 自然科学全般のデータブックとして定評のある理科年表（国立天文台編、丸善刊）は、1958年刊行の昭和34年版から、日本の地形区（もしくは地形区分）の図を載せているが、1986年刊行の昭和61年版までは、渡辺光(1952)の図を掲げている。この図では、北上山地、阿武隈山地としている。1987年刊行の昭和62年版からは貝塚爽平の図に変わった。これらには、北上山地（高地）、阿武隈山地（高地）となっている。なお渡辺(1952)は、日本の地形を高地、低地、火山地域と三種に区分しており、この高地のなかに山脈、山地、高原などが含まれている。一方、貝塚の区分では山地、低地、火山地域と三分し、山地のなかに山脈、山地、高原、丘陵などが含まれる。田山(1935)の論文をはじめ、地学系の分野では「北上山地」の語が用いられてきたことから、文部省が北上「山地」としたことに対しては、学界にはあまり異論がなかった。
- 6) 「東山」とか「室根山」という詳細で具体的な記述があるが、これは編者の大槻修二が、これらの山々の西方にあたる一関に縁の深い人物であるためであろう。彼は大槻如電として知られ、大槻玄沢の孫であり、磐溪の長男で文彦の兄である。
- 7) このことは自然地域名称に限らない。地域によって呼称の異なっている山岳や河川の地名が統一される傾向にあり、例えば「栗駒山」が正しい地名で、「須川岳」が忘れられてゆく、ということは由々しいこと（米地1991b）なのである。

引用文献

- 有井琢磨(1985)：「義務教育における地形用語の研究」, 新地理, 33-2, 3-10.
Harada, T. (1890) : "Die Japanischen Inseln" 126. Verlag von Paul Parey. Berlin.
平凡社地方資料センター編(1990)：『岩手県の地名（日本歴史地名体系3）』, 804. 平凡社.
岩手放送(1988)：『新版岩手百科事典』, 931. 盛岡.
岩手県地理学会編(1983)：『わたしたちの郷土 岩手県』, 191. 光文書院.
岩手日報社(1992)：『岩手年鑑1993年版』, 853. 同社. 盛岡.

- 教科書研究センター編(1978)：『地名表記の手引』. 276. ぎょうせい.
- 建設省国土地理院(1981)：『標準地名集(自然地名)増補改定版』. 247. 同院.
- 松尾俊郎編(1959)：『地名の研究—社会科教授資料—』. 210. 大阪教育図書. 大阪.
- 文部省(1959)：『地名の呼び方と書き方<社会科手びき書>』. 157. 大阪教育図書. 大阪.
- 盛岡市編(1990)：『もりおかの地名』. 511. 盛岡.
- 梶村大彬(1979)：『地理教育と地名』. 地理. 24-11. 59-67.
- 梶村大彬(1986)：『自然地理用語からみた世界の地理名称 下巻』. 462. 古今書院.
- 竹内理三ほか編(1985)：『角川日本地名大辞典 第3巻 岩手県』. 1282. 角川書店.
- 田山利三郎(1935)：『北上山地の地形学的研究 其三 北上・阿武隈山地の開析度』. 斎藤報恩会学術研究報告. 20.
- 渡辺 光(1952)：『日本の地形区』. 地学雑誌. 61. 1-7.
- 山口恵一郎(1955)：『日本主要自然地域の名称の設定』. 地学雑誌. 64. 11-18.
- 山口恵一郎(1984)：『地名の論理』. 236. そしえて.
- 矢津昌永(1889)：『日本地文学』. 475. 丸善.
- 米地文夫(1991a)：『自然地域名「北上盆地」と「北上平野」—地理教育における自然地理用語と自然地域名の問題(1)—』. 岩手大学教育学部研究年報. 51. 105-118.
- 米地文夫(1991b)：『地域からの地域認識—須川岳の名を例として—』. いわて地域科学. 5. 1.
- 米地文夫(1993)：『地理教育用語, 日常語としての「山脈」—「竜脈」から「青い山脈」まで—』. 季刊地理学. (印刷中)

付記

この研究にあたり, 下記の明治期の教科書などの資料は, 主に岩手大学図書館および山形県教育資料館所蔵のものを参照した。また, できるだけ, 原本にあたったが, *を付したものについては『日本教科書体系近代編 第15~17巻地理(一~三)』講談社(1965~1966)収録のものを用いた。

- 荒井郁之助編(1877)：『地理論畧』文部省.
- 學海指針社編(1893)：『日本地理初歩 卷之上』.
- 育英舎編輯所(1901)：『小学地理書 卷一』.
- 金港堂(1894)：『小学校用日本地理』*
- 金港堂(1894)：『小学校用日本地理補習』
- 南摩綱紀(1880)：『小学地誌』文部省*
- 文部省(1876)：『地理描図法』(石橋好一訳)
- 文部省(1910)：『尋常小学地理 卷一』*
- 文部省(1918)：『尋常小学地理書 卷一』
- 文部省(1935)：『尋常小学地理書 卷一』*
- 文部省(1937)：『尋常小学地理書 卷一』*
- 大概修二編(1877)：『日本地誌要略 卷之二』. 青山紅樹書樓*
- 師範学校編(1874)：『地理初歩』. 文部省.
- 師範学校編(1880)：『萬国地誌略. 改正』. 文部省.
- 内田正雄編(1870)：『輿地誌略. 卷一』. 大学南校.
- 若林虎三郎編(1883)：『地理小学 卷之一』. 琴山樓*

これらのほか, 多くの教科書, 地図帳, 辞典類, 日本~岩手県の地域区分関係論文などを参照したが, 煩瑣に過ぎるため, 省略した。